日本中古天台文献の考察（六）

――『覚心集』（「東陽枕双紙」）について――

花野充昭

日本中古天台の書の中で、「枕双紙」と呼ばれるものが、管見によるだけでも三種ある。その一は、恵心僧都全集等に収録されていることによつて、現在我々が容易にその内容を知ることのできる、伝源信撰の『枕双紙』であり、その二は、『覚心集』と題される「東陽枕双紙」であり、その三は、現在西教寺に所蔵されている『梠生枕双紙』である。今回はその中の『覚心集』について考察してみよう。

『覚心集』について、私の見ることができた写本は次の四本である。(イ)慈性書写・年時不明の華蔵院所蔵本。(ロ)祐見書写・年時不明の真如蔵所蔵本。(ハ)書写名・年時ともに不明の大谷大学所蔵本。(ニ)書写名・年時ともに不明の高野山大学所蔵本。この四本を校合してその内容を検討するに、まず標題として「覚心集　東陽枕双紙」と記されている。東陽とは忠尋の房号である。そこで本書について古来の目録を調べると、「覚心集」という書名は見当たらないが、忠尋の著作として「枕双紙」という書名が挙がつている。『日本国天台宗章疏目録』『本朝台祖撰述密部書目』『天台霞標』『山家祖徳撰述篇目集』においてである。これらの目録に記された忠尋の「枕双紙」が本書に当たるものであろう。

『覚心集』が真に忠尋の著作か否かは、忠尋の思想自体が明らかでない現在、これを速断できないが、忠尋の著作として特に疑問となるような記述は見当たらないようである。架空の経論章疏を引用しての主観的恣意的な解釈も見えないし、口伝法門としてこれを秘伝せんとする態度も窺えない。いわゆる口伝主義者の自由大胆なる偽作とは考えられないから、忠尋の著作として特に矛盾が指摘されない限りは、現在のところ伝承に従うしかないであろう。

その内容を検討するに、まず『真如観』と相似の文章が指摘できる。但し『真如観』では片仮名が使われているのに対して、『覚心集』の方は漢文体で書かれている。恵心僧都全集

一巻所収の『真如観』について言えば、四七二頁六行目「種々ノ分別ヲ起シ」から、次頁四行目「タユル事ナシ」までの文とほぼ同じ文が『覚心集』に見られる。その中、『真如観』では、

「種々ノ分別ヲ起シ、広ク真如法界ヲ我ト思ヒテ、自他彼此ノ差別ヲ弁ヘ、五陰六塵ノ煩悩ヲ起シ、不可意ノ境ヲ縁シテ瞋恚ノ煩悩ヲ起シ、中庸ノ境ヲ縁シテハ愚癡ノ煩悩ヲ起シ、此貪瞋癡ノ三毒ヲ根本トシテ」

とある箇所が、『覚心集』では、

「種々分別起、我身広真如法界理不レ念意狭。真如法界我非妄情所計一有情妄我思自他彼此差別弁、五陰六塵種々虚妄境界漸々現起。可意境界縁貪欲煩悩起、不可意境界縁瞋恚煩悩起、中庸境界縁愚癡煩悩起。此貪瞋癡三毒根本」

となつている。『覚心集』の方がより正確であることは言うまでもない。『真如観』で「広ク真如法界ヲ我ト思ヒテ」と言うところは、本来、否定形でなければ意味が通じないし、「可意ノ境界ヲ縁シテハ貪欲ノ煩悩ヲ起シ」の文が脱落していることも明らかである。

さらに四七九頁一行目「有情類ノ真如ノミニ非ズ」から、同頁十二行目「尽スベカラズ」までの文も、ほぼ同文が『覚心集』に見える。但し『真如観』で「真如」と言うところを、『覚心集』では「実相」と言つている。このことは六即について記された箇所（五〇二頁）についても言える。その例文の一二を挙げると次の如くである（前文が『真如観』、後文が『覚心集』）。

(イ)「有情類ノ真如ノミニ非ズ、非情草木等ニモ真如ナレバ」↔「非二有情類実相一、非情草木実相」

(ロ)「理即ノ仏トハ、一切衆生本ヨリ真如性理ヲ備ヘタリ」↔「理即仏者、一切衆生本実相理備」

このように『覚心集』と『真如観』では、「実相」と「真如」の語が入れ替わつているが、このことに関して『覚心集』には、

「如レ是観二自心一如レ実知二自心一云也。於二此自心一有二多異名一。所謂実相、真如、中道、法性、本覚、法身、如来蔵理、第一義、虚空、法界也。別無レ仏只自心仏云也」

と説かれ、『真如観』（四一五頁）には、

「万物皆是無レ非二中道一。異名一ニアラズ。或ハ真如、実相、法界、法身、法性、如来、第一義トナヅク。此等ノ多ノ名ノ中ニ、且ク真如ト云フ名ニヨセテ、諸経論ノ中ニ多ク明セル中道観ノ義ヲ明スベシ。……我身ヲ離レテ外ニ別ノ仏ヲ求メムハ、我身即真如ナリト知ザル時ノ事也」

と説かれている。また、これらの書と同じ頃の成立と推される『菩提集』（恵全五巻四四四頁）には、

「中道観、或真如観、実相観事、其義深無智者力及者有、我

身中胸間仏マシマスト思ハカリノ事、人間界生目鼻ツキ、内心有者ハ、誰人不レ及カ」

と説かれている。中国天台においては、一心三観・妄心観が正統義であったのに対し、『覚心集』等においては、中道観・真如観、あるいは己心に仏の在すを観ずる（＝知る）ことをもって、即身成仏の直道となしたことが知れる。このような「本覚思想」に立脚した「観心主義」は、日本天台で珍重された「本覚讃」の思想が展開していく中で、次第に形成されていったと考えられる。

次に『覚心集』で『大乗起信論』を重視していることが注目される。そこには「生死根源先依二起信論一可レ得レ意」と説かれ、ついで本覚・不覚・始覚を説明して次のように言う。

「初本覚者、未レ迷二出生死界一時事、是則本覚一実真如妙理無明眠未レ起時事。次不覚者、流来生死始分段輪廻至レ今生死流転間。次始覚者、流転後依二知識経巻教一無明眠覚本覚理帰始覚名也」

このような本覚・不覚・始覚の解釈は、『大乗起信論』の説を布衍し、応用解釈したものであって、全く出鱈目な解釈とは言えない。日本天台における本覚思想の形成過程に、「本覚讃」に加えて、『大乗起信論』や『大乗止観法門』の果たした役割は非常に大きなものがある。

さらに『覚心集』では、円密一致の立場が貫かれているが、とりわけ法華経と蓮華三昧経を同等視して、

「何様覚二知自心一耶、答天台意依二法華経一、真言意依二大日経蓮華三昧経等一也。……今既依二法華蓮華三昧経等一仏在知レ者我等衆生皆無レ非レ仏」

と述べている。これと同じ立場に立って、法華経と蓮華三昧経を同本異訳とまで論じているのは『菩提集』で、そこには、

「法華経同本異訳蓮華三昧経中、一切衆生身中胸ノ間ニ三十七尊在云ヘルニ依テ、我天台宗ト真言一切衆生身中無始本有理性仏在許故速疾成仏明也」（四四五頁）

と説かれている。弥留越の説話を引いていることも両書等しく、『覚心集』と『菩提集』とが同じ思想的基盤のもとに著述されたことを推察できる。

このように『覚心集』には『菩提集』や『真如観』とのつながりが推測され、さらに『真如観』の巻首に、「菩提要集云。見事易、議事易カラントテ、仮名字ヲ加テ所レ註ナリトイヘリ」（四五一頁）とある文に注目すれば、これに『菩提要集』を加えて、これらの四書が互いに思想的な連関を保ちつつ、次々と著述されていったことを推察できる。この中で、近年金沢文庫より検出された『菩提要集』には、「長治二年」（一一〇五）の識語があることから、これらの四書は大体忠尋（一〇六五―一一三八）の時代に相前後して著述されたものであろう。

（早稲田大学大学院）